

氏名	渡部 直
学位の種類	博士（芸術学）
学位記番号	博甲第 7828 号
学位授与年月	平成 28 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	彫刻家新海竹蔵の造形観

主査	筑波大学准教授	博士（芸術学）	大原央聡
副査	筑波大学教授	博士（芸術学）	中村義孝
副査	筑波大学教授	博士（芸術学）	守屋正彦
副査	東京福祉大学講師	博士（芸術学）	宮坂慎司

論文の内容の要旨

（目的）

本研究は、大正から昭和 40 年代に活動した彫刻家新海竹蔵（1897～1968）の彫刻表現とその造形観について、体系的に捉え、明らかにすることを目的としている。

（対象と方法）

新海竹蔵の彫刻表現とその造形観について、先行研究を含む文献調査、親族及び新海に彫刻を学んだ人物等、関係者からの聞き取り調査、山形美術館所蔵作品、東京国立近代美術館所蔵作品、筑波大学所蔵作品等の実見調査、及び熟覧を踏まえ、以下①②の考察によって体系的に捉えることを試みている。①新海竹蔵が生涯に渡って示した多様な彫刻表現の在り様を時期と作風によって 4 期に大別し、その制作に影響を与えたと見られる事柄に鑑みながら、各期の造形性について示す。②生涯（4 期）を通じて展開したと思われる新海作品を貫く造形観について言語化し、ひとつの解釈を示す。

（結果）

以下①②によって本研究は新海竹蔵の多様な彫刻表現とその造形観について体系的に捉え、示すに至っている。①新海竹蔵の生涯に渡る彫刻制作活動を初期（1912～1923）、木彫多作期（1924～1946）、木心乾漆多作期（1947～1958）、晩年期（1959～1968）の 4 期に大別し、各期における彫刻表現の造形性について、調査と考察を踏まえた解釈が示されている。②4 期に渡って展開し、新海作品を貫いていた造形観として「素材感と密接に関係したモデル（modelé 仏）及び量感」という内容が示されている。

(考察)

以上の結果を導くため、当該研究では以下のような章立てにより考察を展開している。第 1 章では「新海竹蔵の初期作品と師新海竹太郎」として、新海の制作初期及び、その少年時代について焦点を当てており、新海竹蔵の初期作品について師である新海竹太郎（1868～1927）に影響を受けながらも、自身の表現を模索していたと捉えることが出来るとしている。郷里山形の新海家における仏像制作業の補助を行っていた経緯、また師である新海竹太郎の彫刻表現との比較から、新海の初期作品及び後の彫刻表現への影響について分析及び考察が行われたのち、前掲の結果が導き出されている。第 2 章では「日本美術院所属期の新海竹蔵作品の造形性（1924 年～1958 年）」として新海竹蔵が再興日本美術院彫刻部に所属した 34 年間について焦点を当て、その前半木彫多作期と後半の木心乾漆多作期のそれぞれの造形性について論じている。新海自身による木彫と木心乾漆を中心とした彫刻表現についての言説と、多くの作品の熟覧から、それらの彫刻表現を生んだ新海竹蔵の造形観について言語化を行っている。第 2 章の考察から導き出された「素材感と密接に関係したモドレ及び量感」という内容は、木彫表現においては木という素材でしか成し得ない味わいの「モドレ」（及びそれを内包する「量感」）を有した作品とする事へと新海の関心を向かわせたものであり、それは刀の切れといった木彫における技巧的問題や、木に対するアニミズム的態度を結果として遠ざけたとしている。そしてまた木のみならず、漆という素材においても「モドレ」を追求した結果、新海は木心乾漆表現に到達したとしており、木心乾漆表現に関しては、乾漆層の剥離をも視野に入れた彫刻表現における「時間性」の志向を新海が試みていた可能性についても指摘している。第 3 章では「新海竹蔵の晩年期作の造形性（1959 年～1968 年）」として 1959 年以後、没する 1968 年までの間に制作された石膏とプラスチックを中心とした塑造表現について論じている。晩年期作における抽象性を増した人体表現や、荒々しい印象を受ける作品表面について、1950 年代後半に日本に紹介されたマリーニ（Marino Marini 1901～1980 イタリア）をはじめとしたイタリア具象彫刻、ムーア（Henry Spencer Moore 1898～1986 イギリス）の造形の影響を指摘しながらも、荒々しい印象を受ける作品表面については「素材感と密接に関係したモドレ及び量感」「時間性」といった院展所属期に取り組みされた事柄が展開したものであるとしており、新海の彫刻表現における最終的な「モドレ」のあり様であったのではないかとしている。3つの章における 4 期の彫刻表現についての考察を踏まえ、結語において生涯に渡って展開した新海の造形観として「素材感と密接に関係したモドレ及び量感」の存在があったとして論をまとめている。

審査の結果の要旨

(批評)

新海竹蔵という彫刻家は当時また現在において一定の認識を示され、評価を得ている作家と見ることが出来る。しかしながら本研究で著者の指摘するとおり、大正・昭和初期に新海と同じく塑造と木彫の双方を手がけた作家、例えば高村光太郎（1883～1956）、石井鶴三（1887～1973）、橋本平八（1897～1935）等の彫刻表現に対して昨今学術的研究が活発に行われる傾向に鑑みた際、新海に対するそれは積極的に行われていない現状があり、当該論文の意義はそこにあると言える。先行研究『新海竹蔵の生涯と作品』（1992 年 大林秀喜著）、『新海竹蔵論』（1988 年 長岡恭子著）において示される新海についての包括的資料としての内容、そして著者自身によるその他多くの調査と綿密な論考を踏まえ、新海の彫刻表現について体系的に捉えるために示された当該研究の解釈は信憑に足るものであり、また独自の

審査様式 2 - 1

ものであると判断出来る。また著者が当該研究で今後の課題として挙げるとおり、昨今戦前の木彫家としての認識を持たれる傾向の強い新海の木彫表現について、他の同時代作家の木彫表現との比較考察を今後行うことで、大正・昭和初期の木彫表現についてより多角的な視座から捉えることが可能になることが期待出来る。今後更に活発に研究が行われていくとみられる近代彫刻の分野にとって、当該研究は有意義な知見を示すものであると言える。

また、先行研究には記載されていない、新海の少年時代の絵日記や初期の未発表作品の写真、新海に彫刻を学んだ人物への聞き取り調査から得た知見など、資料としても新たな内容を含んだものである点も評価出来る。

平成 28 年 1 月 7 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。